

ミャンマー国ヤンゴン（旧名ラングーン）の 英領時代の都市計画の源流についての研究

山田 耕治¹

¹日本工営株式会社コンサルタント海外事業本部

（〒102-853 東京都千代田区麹町5-4）

E-mail: yamada-ko@n-koci.jp

ヤンゴン市は、民主化の進むミャンマーの旧首都であり、ミャンマー最大の都市である。ヤンゴン市は、ヤンゴン川の北に19世紀中ごろに英領ビルマの首府ラングーンとして建設された。

本研究では、英領時代のラングーンの都市計画の成立過程を明らかにするとともに、その計画の源流について、類似都市の分析を踏まえて検討した。ラングーンは、同市に40年ほど先だって計画され、その後建設されたアメリカ合衆国ニューヨーク市と、規則的な格子状道路や川に向かって細長い街区形成、街区の寸法など、強い類似性がみられた。

Key Words : *Rangoon, Yangon, City Planning, Myanmar, Burma, Fraser, Montgomerie, New York*

1. 研究の背景と目的

ヤンゴン市は、民主化の進むミャンマーの旧首都であり、人口514万人（2011年）を擁するミャンマー最大の都市である。ヤンゴン市は、ヤンゴン川の北に旧市街地が形成され、都市はその外縁に展開している。この旧市街地は、19世紀中ごろに英領インドのビルマ州（以下、「英領ビルマ」）の首府ラングーンとして建設された。

本研究では、英領時代のラングーンの都市計画の成立過程を明らかにするとともに、その計画の源流について、類似都市の分析を踏まえて検討する。

2. 研究の方法

本研究では、まず文献によりラングーン都市計画の成立に先立つ時代背景とラングーンの成立過程を概観し、その特性を整理した。また、ラングーン都市計画の特性を明らかにし、その計画策定において参照され、影響を与えた可能性のある都市をいくつか選定した。さらに、それらの参照都市の計画面での特性を文献から把握するとともに、ラングーンとの類似性について、いくつかの視点から論ずる。なお、本研究は、現在実施中のJICA調査「ヤンゴン都市圏開発プログラム形成準備調査」で得られた情報を基礎に発展させたものである。

3. ラングーン建設の時代背景

ラングーンは英領ビルマの首府として19世紀に半ばに建設された。ラングーン建設に至る時代背景を、特にア

ジアとアメリカにおけるイギリス帝国の都市建設の歴史的な過程とともに振り返る。

(1) アジアにおけるイギリス帝国

イギリスではアジアとの貿易を拡大するため、1600年にイギリス東インド会社が結成された。しかし、先行するオランダとの競合から、イギリスはインドに注力することとし、17世紀初頭以降、インド各地に商館を開設した。その中でもカルカッタは、18世紀初めにムガル帝国から自由貿易を保障されたことを契機に経済活動が急速に拡大し、1772年には英領インドの首府となる。

インドの大半の地域が19世紀初めまでにはイギリスの支配下となり、東インド会社はさらに東アジアへの展開を目指し、マラッカ海峡を望むシンガポールを建設した。さらにインドと国境を接するビルマ（現在の国名はミャンマー）に侵攻を図り、19世紀中頃に植民地化した。

(2) アメリカにおけるイギリス帝国

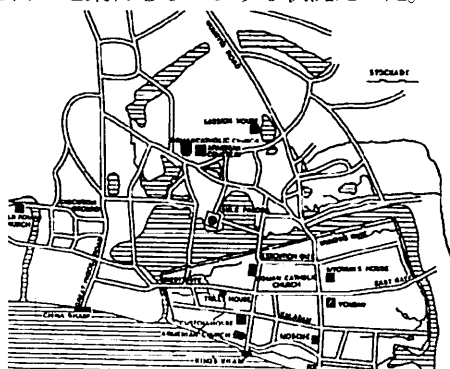
アメリカ大陸では17世紀頭に最初のイギリス植民地がヴァージニアに設立され、以降、多数のイギリス人移民がマサチューセッツ周辺などに入植を始めた。その後イギリスとの確執から独立戦争となり、1776年には独立宣言が発表された。独立直後はフィラデルフィアを暫定首都としたが、1800年にはワシントンDCが建設され、正式にアメリカ合衆国の首都となった。また活発な貿易により、港湾を擁するニューヨークの人口が急増し、19世紀初頭にはマンハッタン島の都市計画が導入された。

4. ラングーンの成立過程¹⁾

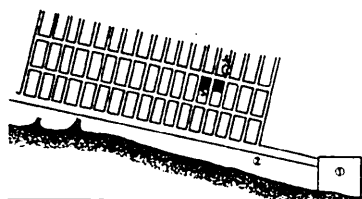
(1) ラングーン建設の前史

植民地化以前、1754年にアラウンパヤー王がビルマを統一し、ヤンゴン²⁾をその首都とした。当時の地図(図1(1))では、川辺にはスーレ・パゴダ³⁾が川から引き込んだ広い池に面して立地し、市街地は堤防で囲まれている。

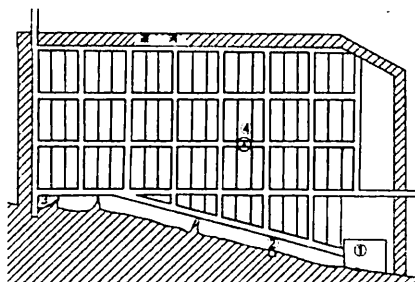
19世紀初めの第一次英緬戦争によりイギリスがヤンゴンを支配下におき、これをラングーンと改名し、1852年の第二次英緬戦争でビルマ支配を確立するとラングーンは英領ビルマの首府となった。その時のラングーンは、アラウンパヤー王の町が放棄され、第一次英緬戦争によってイギリスが得たラングーンも火災によって壊滅し³⁾、ほとんど何の建築物もないような状況だった。



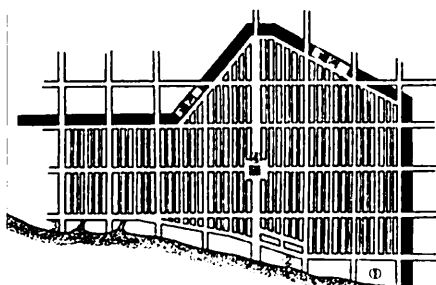
(1) アラウンパヤー王のヤンゴン (18世紀中頃)



(2) モンゴメリー計画をもとに再構成した1次修正計画 (1852年9月)



(3) さらにフレイザーが修正した2次修正計画 (1853年1月)



(4) 承認されたラングーン計画

共通凡例 ①公共埠頭 ②税関 ③ゴドウィン埠頭 ④スーレ・パゴダ ⑤貯水池
出典: Ram 海峽書院に加工

図1 ラングーン計画の推移

(2) モンゴメリーの提言

英領ビルマの首府ラングーン建設にあたって、モンゴメリー⁴⁾の意見が求められた。モンゴメリーは、河畔に広がるラングーンの立地に大きな可能性を見出し、1852年9月にはラングーン建設に関わる意見書を提出した(図1(2))。川辺に150フィート⁵⁾(46m)の広い緑地を置き、ここには一切の建物を禁止し、この緑地と直行するように幅員60フィート(18m)の道路を200フィート(61m)間隔で南北に配置し、これと直行する東西の道路は南北の道路よりも広い100フィート(30m)の幅員で、500フィート(152m)間隔で設けることを提案した。

(3) フレーザーのラングーン1次修正計画

モンゴメリーの意見書を受け、ラングーン計画の実務はフレイザー中尉⁶⁾に託されることとなった。スーレ・パゴダを取り囲んでいた池は、市街地の造成土などによって埋め立てた平坦地に造成され、幅員40フィート(12m)の道路網を配置するするという現実的な計画に修正された。

(4) ビルマ総督ペイレの意見と2次修正計画

1852年12月、総督ペイレ⁷⁾はフレイザー計画を検討し、いくつかの修正を指示している。川沿いには150フィート(46m)幅の幹線道路を計画し、これと交差するように市街地の西端のゴドウィン港から市街地北部にあるシュウエダゴン・パゴダに至る幅員100フィート(30m)の幹線道路を設け、さらに浸水の原因となる高潮の進入を防ぐよう、市街地を囲う運河の開削が指示された。

知事の意見を受け、フレイザーは1853年2月に2次修正計画の図面を引いた。幅員100フィート(30m)の南北の幹線道に加え、東西はすべて100フィート(30m)幅員の道路が交差する。格子状の幹線道路の中心線は900フィート(274m)間隔で置かれ、1次修正計画の格子状の道路パターンを踏襲しているが、方向は川に沿わず、東西南北の方位に合わせた。南北の幹線道路の間には、少し狭い道路が2本ずつ計画された。つまり、南北・東西の幹線道路に挟まれた800フィート(244m)角のブロックが、南北に3つに分割される計画であった(図1(3))。

(5) 承認されたラングーン計画

最終的に公式に承認⁸⁾されたラングーン都市計画は、2次修正計画にさらに変更を加えたものであった。市街地のやや東側にあったスーレ・パゴダを軸に幹線道路を動かし市街地の中心に配置し、その周辺は道路が迂回し、道の中央にゴダが来るようにした。スーレ・パゴダの前の南北の道路は幅員が200フィート(61m)と他の道路よりも広く、都市の中心性を体現している。南北の100フィート(30m)の幹線道路はスーレ・パゴダの西に4本、東に3

本が設定され、その間隔は850フィート(259m)である。30フィート(9m)、50フィート(15m)の街路によってブロックは縦に6つに区分している。道路幅を考えると、ラングーンの市街地のブロックはおおむね120フィート(37m)×800フィート(244m)くらいのサイズになった(図1(4))。

5 ラングーンの特性と類似都市

ラングーンの成立過程および時代背景から見て、ラングーン計画に参照された可能性のある都市(以下、「参照都市」)を表1のように選定した。
次にラングーン都市計画の特性を以下に抽出し、候補都市との間で類似性を検討した。

- 特性A: イギリス人あるいはイギリス帝国に関係する都市計画家の関与: ラングーンは、イギリス帝国の関係者がその都市計画に参画していた。
- 特性B: 地形的な制約が小さい計画都市: ラングーンは地形的な制約が小さく、また火災によってほぼ壊滅した場所に新たに造られた計画都市であった。
- 特性C: 規則性の高い格子状道路網: ラングーンは、その東西および南北の道路がほぼ等間隔で並ぶ、規則性の高い格子状道路網を持つ。
- 特性D: 19世紀初頭の建設時期: ラングーンの計画・建設は19世紀中ごろであり、他都市の都市計画が参考にされるとすれば、直近100年ほど、すなわち18世紀中頃から19世紀中頃以前ということになろう。

表1 ラングーンの都市計画影響を与えた可能性のある都市

都市名	国名	都市建設に関連する主な出来事
カルカッタ	英領インド	● 英領インドの首府(1772年)となる。 ● 1820年以降、急速に発展
シンガポール	英領シンガポール	● イギリス東インド会社の請負に建設(1819年) ● ラッフルズの命によりジャクソン中尉による都市計画の策定(1822年)
フィラデルフィア	アメリカ合衆国	● イギリス国王チャールズ2世が、広大な用地をウィリアム・ペンに譲渡(1681年) ● ペン自らの設計により格子状街路の町を建設し、フィラデルフィアと命名(1682年) ● アメリカ合衆国の独立後、1790年12月から10年間、フィラデルフィアが暫定首都
ワシントンDC	アメリカ合衆国	● ジョージ・ワシントンの命によりフランス人ランファンが都市計画を策定(1791年) ● ワシントンへの首都移転が実施(1800年)
ニューヨーク	アメリカ合衆国	● イギリス王チャールズ2世はオランダの植民地を征服しニューヨークと改名(1664年) ● 独立後、大統領就任式がニューヨークで行われ、短期間、暫定首都に(1790年) ● 急激な人口増を背景に格子状の道路網を主とする都市計画案を策定(1811年)
ラングーン	英領ビルマ	● シンガポールの都市計画に携わったモンゴメリーが都市建設に関する意見書を提出(182年)。翌年フレージャーが修正計画を策定

表2 ラングーンと参照都市の特性の共通性

参照都市名	特性A	特性B	特性C	特性D	総合判定
カルカッタ	◎	×	×	×	
シンガポール	◎	◎	△(一部地区)	◎	○
フィラデルフィア	◎	◎	◎	×	○
ワシントンDC	◎	◎	△	◎	○
ニューヨーク	◎	◎	◎	◎	◎
凡例	◎: 類似性が高い	○: 類似性あり	△: どちらともいえない	×	類似性が低い

(1) カルカッタ

カルカッタは、ラングーン計画に携わったモンゴメリーやフレージャーの所属先であるベンガル工兵隊のあった場所であり、ラングーンとの繋がりは深いといえるが、カルカッタはかなり不規則な街路網をもち、ラングーン計画においてこれを参照したとは考えにくい。

(2) シンガポール

1822年、ラッフルズは、駐屯部隊の工兵であったフィリップ・ジャクソン中尉を座長とする都市計画委員会を結成し、都市計画の策定を行わせた⁹⁾。この計画によれば、ほぼ中央部にヨーロッパ人街区が置かれ、その街路網はラングーンと類似する長方形の格子状である(図2)。ただし、実際にはこの計画通りに建設は進まなかったようで、計画図にあるような長方形格子状街路を持つ市街地は計画通りには実現していない。

(3) フィラデルフィア

イギリス国王チャールズ2世はアメリカのニュージャージーの広大な用地をウィリアム・ペンに与え、1682年、ペン自らが設計し、植民地を建設し、フィラデルフィアと名付けた¹⁰⁾。ペンの計画では、デラウェア川とその支流に挟まれた長方形の土地の中央に十字となるような大通りを配置し、全体に格子状の道路網を敷設している(図3)。中央の南北・東西の2本の通りはそれ以外の道路より広く、100フィート(30m)の幅員である。この大通りの配置は、ラングーンのフレージャーの計画にも見られ、共通するデザイン要素と考えられる。ただし、川は市街地の東西にある。また時代的にもラングーン建設と200年近く隔たっており、ラングーン計画への影響は小さい。

(4) ワシントンDC

アメリカ合衆国独立後、初代大統領のワシントンから首都の計画担当を任せられたのは、ランファン¹¹⁾である。

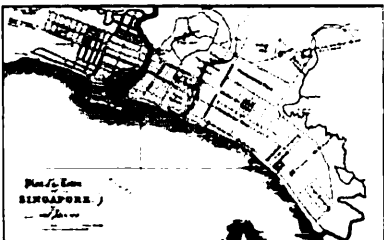


図2 シンガポールのジャクソン・プラン(1822年)

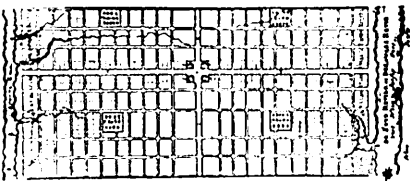


図3 ウィリアム・ペンのフィラデルフィア計画

市街地は南北と東西の格子状の道路を基本としているが、街区の幅（東西）はリズムカルに変化させている。また、格子状道路に対角線方向の放射状道路を加えている。格子状道路と放射状道路が交差する場所には円形のサークルか、あるいは方形の広場を設けている。こうした点は、ラングーンの道路網とは大きな差異がある。

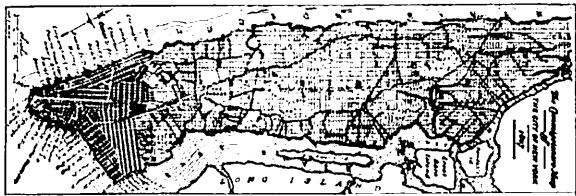
(5) ニューヨーク

ニューヨーク市では1811年にマンハッタン島全域をカバーする格子状の道路網の計画が正式に採択（図5）された¹²⁾。この計画では、東西方向には、60フィート(18m)幅の通りがあり、そのうち7～10本ごとに100フィート(30m)幅の通りが置かれた。南北方向は100フィート(30m)幅の大通りが16本（後に2本追加）置かれた。東西方向の通りの間隔は200フィート(61m)、南北の大通りの間隔は場所によって異なるが、800フィート(244m)が多い。街区割は道路間隔によっていくつかのパターンがあるが、200フィート(61m)×800フィート(244m)の細長いブロックが多い。これはラングーンの120フィート(37m)×800フィート(244m)の街区と類似するが、やや肉厚である（図5）。また川から奥に向かって細長い街区形状やも同様である。

6 おわりに

本研究では、ラングーンの都市計画の特徴や時代背景から、ラングーン都市計画の源流をなすと思われる都市計画の事例を探求した。その結果、ラングーンから40年ほど前に計画され、活発な都市建設が進められていたニューヨークとの高い類似性が発見された¹³⁾。

ただし実際の計画にあたって関係者がニューヨークの都市計画を参照したという文献的な証拠は見いだせていない。今後、当時の文献などにより検証が必要である。



出典：NYC

図4 ニューヨーク計画（1811年承認、部分、右が北）

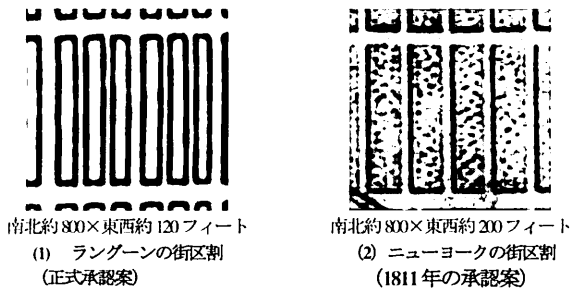


図5 ラングーンとニューヨークの代表的な街区割

謝辞：本研究を進めるにあたって、ヤンゴン市開発委員会、JICA経済基盤開発部、同ミャンマー事務所、ヤンゴン都市圏開発マスタープランの調査団の方々に多くの示唆や協力をいただいた。記して謝辞とします。

補注および参考文献

1) この項の記述は多くを B. P. Pearn, A History of Rangoon, American Baptist Mission, Rangoon, 1939.によっている。

2) スーレ・パゴダは旧市街地の中心部にあり、市北側にあるシュウエダゴン・パゴダとともにヤンゴンの主要な歴史的な仏塔で、ともに現存し、黄金に輝くヤンゴンのランドマークとなっている。

3) Kyaw Kyaw, Emergency Preparedness of Yangon, in F. Krause et al. (ed), Megacity Yangon, Lit. Berag Berlin, 2006.によれば 1851 年にラングーンで大火があり、市街地を延焼した。あるいはイギリスによる砲撃が原因であったのかもしれない。

4) Dr. William Montgomerie (1797 - 1856) は、スコットランド生まれ、1818 年から没する 1856 年まで東インド会社付きの医師として活躍した。1819 年から 1842 年までにシンガポールに滞在し、ラッフルズが指示して設置したシンガポール都市計画委員会のメンバーを務めた。

5) ラングーンおよび参照都市はいじめもイギリス式の計量単位を使っているため、この論文でもフィートで表記し、カッコでメートル法を表示する。

6) Lt. Alexander Fraser, (1824-1898) は 1843 年にベンガル工兵隊に中尉として入隊、1886 年には將軍 (General) となった。

7) Arthur Phayre は、第二次英緬戦争後に初代英領ビルマ總督 (在位 1862-1867 年) として赴任した。

8) Pearn(前掲書)では計画承認の年月日を記載していないが、1854 年からは計画に基づく土地売買の支払いがルール化されていることから 1853 年中には承認されたものと思われる。

9) ここの記述は、マヤ・ジャヤパール、シンガポール 都市の歴史、木下光沢、学芸出版社、1996 年および Rev. W. Creoss, Stamford Raffles, in Makepeace et al. (ed) One Hundred Years of Singapore, Oxford Univ. Press 1991 による。

10) レオナルド・ベネーヴォロ (佐野敬彦他訳)、図説・都市の世界史、相模書房、昭和 58 年刊による。ウィリアム・ペン (William Penn 1644-1718 年) はアメリカの政治家。

11) ピエール・ランファン (P. L'Enfant, 1754 - 1825 年) は、フランス人の建築家・都市計画家である。ランファンのワシントン DC 計画には、JA.ピーターソン (兼田敏之訳)、アメリカ都市計画の誕生、鹿島出版会、2011 年によれば、ヴェルサイユ宮殿などフランス・バロック様式の影響が指摘される。

12) ニューヨーク市議会では人口の急増を背景に 1806 年、マンハッタン全域にわたる正確な測量と地図の作成が急務であるという結論に達し、ニューヨーク州測量局の測量技師デ・ウィットを含む 3 名からなる審議会を設置した。猿谷要、ニューヨーク—世界の都市の物語、文春文庫、1999 年、計画図は New York City Council, Remarks of the Commissioners for Laying Out Street and Roads in the City of New York, 1811、図 5 の拡大図は William Bridges (1811).による。なお、1811 年の計画図には格子状道路網を斜めに貫く道はなく、ブロードウェイが幅幅・整備されたのは 19 世紀後半である。

13) Pearn (前掲書) では、ラングーン同様に白紙から計画された事例としてロンドン大火(1666)の復興の際の Valentine Knight の計画を参考例として注記に挙げている。しかし、Knight の計画は実現しておらず、さらに 200 年近く前の計画でもあり、これがラングーン計画に参照されたとは考えにくい。

(2013.4.5 受付)